

櫛かんざし美術館

櫛かんざし美術館では、4,000 点を超えるコレクションの中から、400 点の伝統的な髪飾りが展示されています。コレクションには、江戸時代（1603-1867 年）から昭和時代（1926-1989 年）の精巧に作られた櫛やかんざしが含まれています。装飾品の多くは、金箔の背景に花などの自然物体を描く琳派（りんぱ）を発展させた尾形光琳（1658-1716 年）などの工芸家が、裕福な顧客向けに作った特注品でした。

櫛かんざし美術館のコレクションは、日本のファッションにおける社会的な変化の影響を強調しています。べっ甲（江戸時代の禁輸対象品目）製の初期の櫛は、家一軒ほどの値がついたものと思われ、その富のほどを表すものでした。江戸時代に入って建築様式がより複雑で装飾的になるのに合わせて、髪型もまたより大きく凝った装飾になっていきました。しかし、明治時代（1868-1912 年）に日本が現代化を果たす中、女性はより洋風の髪形をするようになり、髪飾りはより小さく目立たないものになっていきました。櫛かんざし美術館のコレクションは、セルロイドなどの新しい素材により、より手ごろな価格で凝った髪飾りが提供できるようになった、戦後の時期のものまで続きます。

櫛かんざし美術館には、江戸時代の階級の高い侍や裕福な商人が所有していた携帯用筆記用具（矢立）も展示されています。その多くは、木製、金属製、あるいは象牙でできた特注品で、複雑な彫刻や象眼が施されています。

櫛かんざし美術館の建物は、伝統的な蔵を模して建てられたもので、正面には大きなかんざしが飾られています。

櫛かんざし美術館は、午前 10 時から午後 5 時まで営業しています。（月曜日と金曜日は休館日です。）